

## 「不信仰への誘惑」

Ⅱ列王記 18:26-35

## 【1】序

主に対して誠実を尽くしてきたヒゼキヤであったが、アッシリア王センナケリブが主要都市ラキシュを攻め取った時、彼はついにアッシリアの要求に屈してしまった。しかし、アッシリアの要求を受け入れることが、救いの道ではないことはすぐに明らかになった。人の目に優れていると映るものはときに神への不信仰を誘う。しかし、それは決して人を守らない。イスラエルはアッシリアではなく不信仰のゆえに今、窮地に立たされたのだ。彼らはこのときの原因を悟らねばならなかった。

## 【2】問われる信仰の範囲

「いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか」(18:19) というアッシリアのことばは、信仰を知る者の巧みな誘惑のことばであった。今、目の前に迫る危機に対してユダの信仰は揺らいだ。イスラエルの主なる神に信頼していることが、このときどれほどの役に立つのか。この信仰は宗教的な範囲においては力があるが、軍事的な判断、政治に対して神への信仰はどう生かされるというのか、圧倒的な力をもってアッシリアは彼らの信仰に挑戦した。

クリスチャンは確かに神への信仰をもって毎日生きている。しかし、その信仰の範囲、領域はどこまで広げられているだろうか。イエス・キリストに対する信仰はどこまで有効なのか。私たちが神を信じるということはどういうことであるのか問われているのである。アッシリアのことばによって、私たちの信仰の実態が問われるのである。

## 【3】祝福はどこに

アッシリアは強大な力を持って彼らが拠り所としている神への信仰を揺るがした。それは恐怖による支配だけではなく祝福をも保証するという甘い誘惑も含んでいた。もし、アッシリアに服従するならば祝福をも保証するというのである(31)。私たちは単に不幸から逃れる信仰ということだけではなく、祝福を目的とした信仰からも守られる必要があることがわかる。そこには神中心ではなく、人間中心主義の誘惑があり、落とし穴でもある。アッシリアは決して祝福を保証するものにはならないのである。

## 【4】不信仰への誘惑に対して

主はエルサレムを救ったか？(35) この問は具体的であり、直接神への信仰に挑戦することばである。第三者から見れば、神の民と言われるイスラエルの人々もまた異邦人と同じように圧倒的なこの世の力に対して無力に見えたのである。信じていても病気になることもある。あるいは「不運」に見舞われることもある。正しいものがどうして苦しむのか？この問いは大きな神学的、信仰的問いである。この問いに答えるには、私たちは完全に主の支配のもとにひれ伏さなければならない。人間的な考えを挟み込んではいならない。ユダ王国は最終的には完全な主の力によって救われることになる。人の力は一切関係のない主のみわざを見ることになるのである。

ラブ・シャケのことばは、真の信仰者を試すことばであった。これは、ユダに対しては再び信仰を燃え立たせるチャンスでもあったのである。神はあわれみの神だからである。